

# 弔辞 武内義範先生の遺徳を 忍んで

ヤン・ヴァン・ブラフト  
Jan VAN BRAGT

武内義範教授（1913-2002）は4月12日（金）の晩に逝去された。葬儀は4月15日（月）に願誓寺で営まれた。願誓寺は四日市市にある真宗高田派に属する寺院であり、彼自身が住職を務めていた。友人の僧侶たちが経文を読み、参列者が焼香し献花した。高田派管長猯下、日本学会を代表して辻村公一教授、京都宗教哲学学会を代表して長谷正當教授、旧友の梅原猛教授、願誓寺檀家代表が弔辞を述べた。

この出来事のイメージの中でもいつまでも私の心に留まると考えられるのは、60年以上人生をともにした奥様が、最後に棺が開けられたときに武内教授と交わした親密な会話の瞬間である。

南山宗教文化研究所を代表して、ポール・スワンソン所長とヤン・ヴァン・ブラフト元所長、ジェームズ・ハイジック前所長が参列した。武内義範教授の逝去により、研究所は強力な支持者と親密な友人を失った。彼は、研究所が誕生したときに揺りかごの回りに立っていた「名付け親」の一人

最後の生き残り だったと言っても過言ではない。日本のキリスト教という本当のマイノリティーに属し、あまり知られていないわれわれに、率直な支持によって周囲の偉大な宗教と学術的なレベルで対話をするのに十分な自信を与えてくれた日本の著名な宗教学者が、われわれの「名付け親」になってくれたのだった。東京側（東京大学）からは、小口偉一教授と柳川啓一教授、また、京都側（京都大学）からは西谷啓治教授と武内義範教授がとりわけ言及に値しよう。これら4名のうちで研究所もっとも密接な接触を維持してもっとも積極的に協力してくれたのは、武内教授であった。幸運な偶然であったが、研究所が1976年のはじめに活動を始めたその時点

に、武内教授はまさしく京都大学を退官し、四日市のお寺に移り、名古屋近郊の愛知学院大学で教授職に就いたのだった。私が記憶しているかぎり、武内教授と宗文研の密接な関係の圧巻は、以下のようなものであった。

1976年10月5日 武内教授が親鸞思想（とりわけ80代の親鸞の文献）について数年間続く各週のセミナーを研究所で開始した。

1980年3月31日～4月2日武内教授は、「京都学派とキリスト教」に関する第三回シンポジウムに参加し、「田辺哲学と絶対無」に関する傑出した論文（研究所が後年出版した『絶対無と神』（春秋社）所収）を発表した。

1983年の『南山プレティン』には以下のような記述が見いだされる。

われわれは2月2日に助言者で協力者の武内義範教授の70歳の誕生日を祝った。

同年、武内義範著、ジェームズ・ハイジック編訳、*The Heart of Buddhism* を南山宗教文化研究叢書の第4巻として出版した。

その後、同年、武内教授は、宗文研のスタッフの協力のもとで、ニューヨークのクロスロード出版によって企画された『世界の霊性』叢書の仏教に関する二巻本の編集を引き受けた。この協力関係は、第二巻が出版された1999年まで続けられた。

武内教授は、すばらしい散文を書く才能に恵まれていた トマス・カスリスは「彼はメタファーの大家、イメージの魔術師だ」と書いている が、多作ではなかった。弟子たちに準備され、1999年に出版された選集は、たかだか全五巻にすぎなかった。しかし、彼の学識は偉大な深さと独創

性を示していた。このことは、日本政府が1977年に彼に紫綬褒章を授与し、さらに、その後、学士院会員に任命したときに公式に認められた。同時に、宗教学、哲学、初期仏教、親鸞の思想などに対する広範な関心、またヘーゲル哲学、西田幾多郎の思想、恩師田辺元、実存哲学、神学的解釈学など、彼が吸収した多様な影響、さらに、彼の人格に結合された学識と宗教心がユニークな共生をしていたため、彼の学識に対して一つのラベルを貼ることはむずかしい。彼自身、かつて述べたように、「私は日々取り組んでいるのは今日の宗教哲学の諸問題であるが、個人的には、私の学者人生の真の対象は親鸞の『教行信証』である」。

事実、彼はすでに28歳の若さで『教行信証の哲学』（1941）と題する親鸞の主著に関する画期的研究を出版していた。したがって、人は、武内教授が基本的には宗学者であると結論づける誘惑に駆られるかもしれないが、しかし、その肩書きは彼にふさわしくない。親鸞の文献を内側から研究する真宗の宗学者とは異なり、彼はいわば、それを「外側から」、宗教哲学の視点から研究したのであった。しかしながら、彼は、またしても「宗教哲学者」のカテゴリーに完全に当てはまるわけでもない。もちろん、それにも当てはまるのだが、彼はそれ以上の存在だった。おそらく、われわれは彼のことを「浄土仏教の哲学」と呼ぶことができるかもしれない。

そのような分類がどうであろうと、われわれが武内教授の浄土仏教に関する著作の中でもっとも感銘を受けるのは、理論は、庶民のレベルの生きた信仰と調和しなければならないという彼の主張である。彼は、いずれにしても浄土門が凡夫の仏教であるという感覚を伝える学説を欲していたので

あった。関係ないかもしれないが、武内教授は、キリスト教に対して永続的な深い共感を抱いていて、彼自身の浄土信仰の基本となる宗教的な心の動きの多くを共有しているものと感じていた。

最後に、個人的な思い出を書かせていただきたい。私は35年前、浄土真宗の僧侶、武内義範師の指導のもと、京都大学で学ぶという幸運を得たが、まもなく彼は、私にとって浄土仏教の宗教心の生きた化身となり、そのことはいつまでも変わりがなかった。その宗教心には、阿弥陀仏の慈悲深い配慮の対象として選ばれているという揺るぎない確信があり、それは、自らが凡夫であり救いがたい罪人であるという深い謙遜伴っていた。昨年の中ごろ、四日市にある

彼の寺院を訪ねたときに、武内教授が最後に見送って下さったときに目にした、無私無欲の人物が放つ全面的な善意に満たされた晴れやかな笑顔を、私は決して忘れないだろう。私は、天の父が私をそのような笑顔で見守って下さっていることを願うのみである。

武内教授自身がアルベルト・シュヴァイツァーの人物を特徴づけるのによく使った言葉を借りるならば、私は、武内義範教授のことを「聖者のような深い宗教的人格をもった卓越した思索家」としていつまでも心にとめておくことだろう。

ヤン・ヴァン・ブラフト  
南山宗教文化研究所元所長  
南山大学名誉教授